

飯豊天皇 埴口丘陵より出土した倒木の樹種

鈴木伸哉（早稲田大学）・能城修一（森林総合研究所）

平成 17 年度に事前調査がおこなわれた飯豊天皇埴口丘陵の第 10 トレンチ（前方部端）より出土した倒木の樹種について報告する。

資料と方法

樹種の同定をおこなったのは、第 10 トレンチ IXa 層より出土した倒木 1、2、3 の 3 点である。樹種同定は木材切片のプレパラート観察によりおこなった。それぞれの木材より切り出されたブロック試料から木材切片を採取し、切片をガムクロラルで封入して同定用プレパラートとした。プレパラートには IIT-001～003 の標本番号を付した。これらは出土資料とともに宮内庁書陵部に保管されている。

結果

倒木 1 はスギに、倒木 2、3 はケヤキに同定された。それぞれの分類群の木材解剖学的な記載をおこない、標本の顕微鏡写真を図版 18 に示し、同定の根拠を明らかにする。

スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科（倒木 1: IIT-001）

垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。晩材は量多く明瞭。樹脂細胞が早材の終わりから晩材にかけて接線方向に散在する。仮道管の内壁にらせん肥厚は認められない。分野壁孔は大型で孔口が水平に開くスギ型で、1 分野に 1 - 2 個。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科（倒木 2: IIT-002、倒木 3: IIT-003）

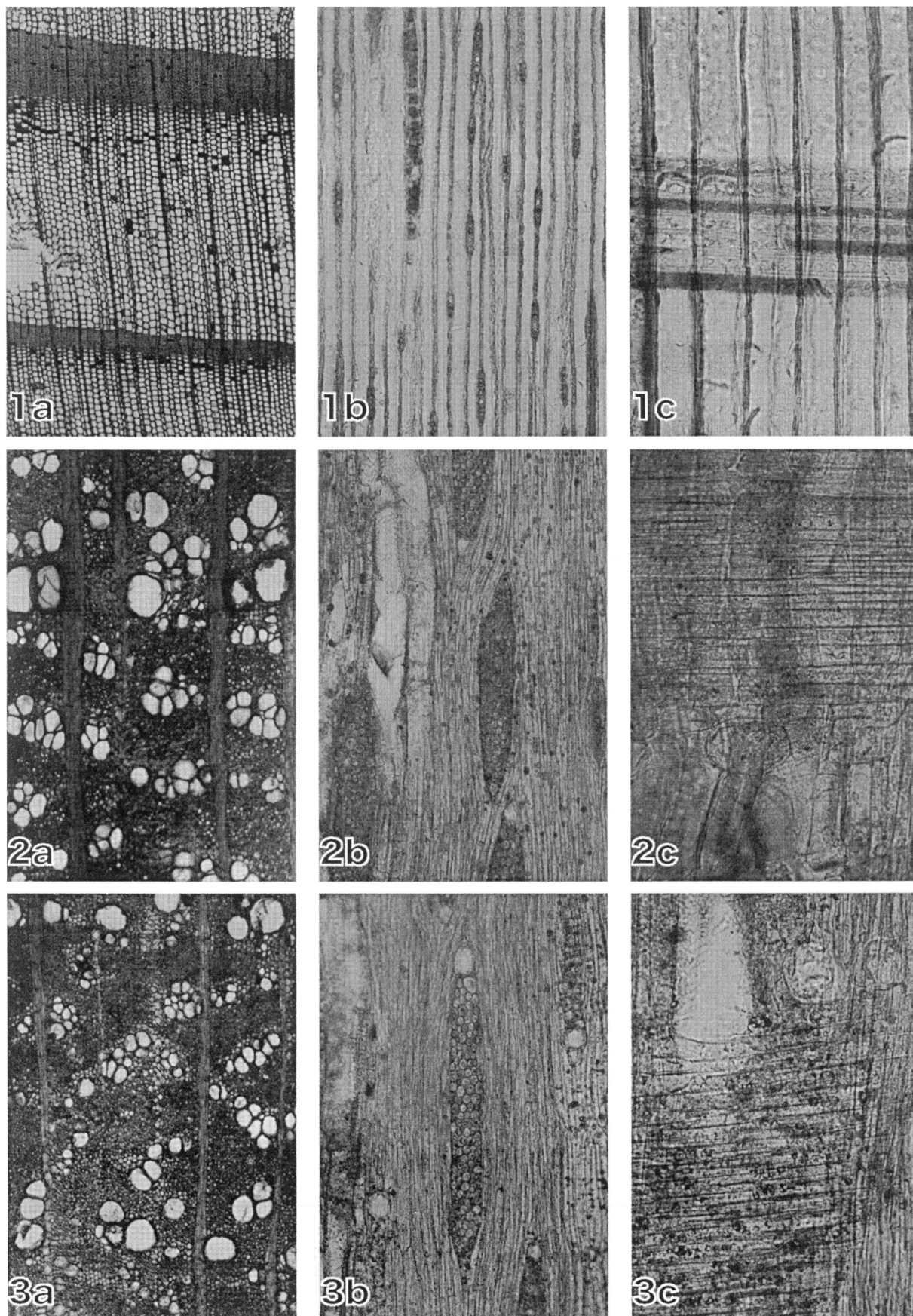
大型でまるい道管が年輪のはじめに 1 列に並んで孔圏をなし、晩材では小型で薄壁の道管が集合して接線方向に連なる帯状に配列する環孔材。早材から晩材への移行は急。道管の穿孔は単一。小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の 1 - 2 細胞が直立細胞からなる異性で、1 - 10 細胞幅。しばしば上下端に大型の結晶をもつ。

スギ、ケヤキのいずれも、当時の植生を考えると陵墓周辺には自生していても矛盾はない。遺跡出土例を見ると、同時代の奈良県・大阪府地域ではスギ材はさまざまな用途に用いられているが、同じ針葉樹のヒノキに比べるとそれほど多くはない。ケヤキ材は容器に多く使われている。県内の古墳から出土した木製品にはコウヤマキが用いられた例が多く⁽¹⁾、スギやケヤキが用いられた例は稀であることから、本トレンチから出土した倒木は周辺植生からもたらされた可能性が高いと考えられる。

註

(1) 金原正明・金原正子「木製品の樹種同定、御墓山古墳出土木材の樹種一覧」『御墓山古墳 - 上総町 天理市埋蔵文化財調査概報 平成 4・5 年度 (1992・1993 年)』、天理市教育委員会、66-70 頁、図版 43-44、1996 年。

酒井温子「小墓古墳、御墓山古墳、四条 2 および 7 号墳の木製品について」『権威の象徴 - 古墳時代の威儀具 - 榎原考古学研究所附属博物館特別展図録 第 53 冊』、奈良県立榎原考古学研究所附属博物館、73 頁、2000 年。



飯豊天皇埴口丘陵第10トレンチ出土木材の顕微鏡写真

1a-1c: スギ (IIT-001), 2a-2c: ケヤキ (IIT-002), 3a-3c: ケヤキ (IIT-003). a: 横断面 $\times 40$, b: 接線断面 $\times 100$, c: 放射断面 $\times 400$ (2c-3c: 200).